

主体的な学習者の育成を目指した中学校社会科の授業づくり

～UDLの視点を取り入れた授業実践～

高橋 拓巳 (教育実践コース)

1 主体的な学習者の育成を目指した中学校社会科の授業づくり

(1) 課題意識

教室の中は、教科に苦手意識を感じている生徒や発達障害を抱える生徒など、様々な想いや背景を抱えている生徒がいる。そのため、教室は多様性に溢れた空間である。さらに、その多様な生徒たちの中には授業に参加できていない生徒がいる。しかし、その生徒たちが授業に参加できない理由は、その生徒に問題があるからではない。授業やカリキュラムに問題があるからだと考える。

従来のような知識重視の教師による教え込みの授業では、多様な生徒一人一人にこれから求められる資質・能力を育成することは難しく、生徒たちが進んで学習に向かっていくことはできないと考える。

そこで、筆者はこれからの中学校社会科授業の一つの在り方を考えた。それは、UDLの視点を取り入れ、生徒が学習を自ら調整しながら、課題を追究していく授業である。

(2) 中学校社会科とUDL

本研究では、米国の the Center for Applied Special Technology (2011) (以下 CAST) が示す「学びのユニバーサルデザイン (UDL) ガイドライン」を活用した。

UDLとは、『「全員一律で対応させようとする (one-size-fits-all)」ようなカリキュラムに対処す

る枠組」であり、また、「学習者が主体的に学ぶことができるようにするための理論的枠組」である (UDL研究会,2018)。UDLガイドラインは、その枠組として、「取組」「提示 (理解)」「行動と表出」のための多様な方法の提供を原則として、9つの内容を明示している。

中学校学習指導要領解説社会編 (文部科学省,2018)では、主体的・対話的で深い学びが実現されるよう、「生徒が社会的事象等から、学習課題を見だし、課題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果をまとめ、自分の学びを振り返ったり、新たな問いを見いだしたりする」ことが重要であると述べている。このような中学校社会科の求める主体的な学習者の姿はUDLガイドラインに示される目指す姿と関連している点や、重なっている点が多い。中学校社会科の求める主体的な学習者の姿を実行していくには、UDLの概念が有効であり、活用する必要があると考えた。

(3) 「主体的な学習者」と「主体的な学習」

本研究を進める上で目指す主体的な学習者の姿を明確にする必要があると考えた。そこで、中学校学習指導要領解説社会編やUDLガイドライン、実際の生徒の学びの姿を基に、本研究が目指す「主体的な学習者」と「主体的な学習」を定義した (図1)。

「主体的な学習者」とは、1単元や1時間の授業で育つものではない。そのため、本研究では、生徒

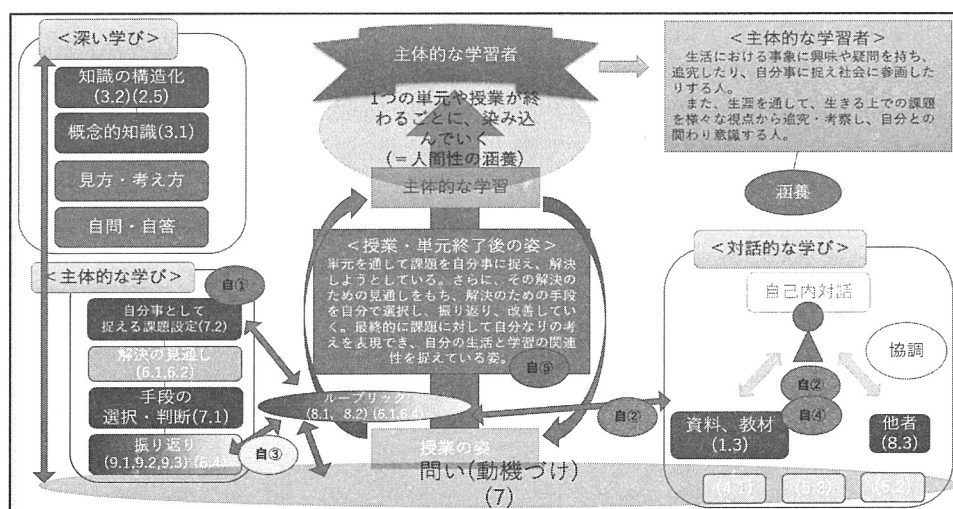


図1 「主体的な学習者」と「主体的な学習」

が主体的に学習を行い、図に示した〈授業・単元終了後の姿〉が実現されることを目指した。

2 授業実践1 歴史的分野「聖徳太子の政治改革」

(1) 実践の概要

1年次前期では、聖徳太子の政治改革が大陸文化に影響を受けていたことに気づくことをねらいとした授業実践を行った。学習に対して無気力な生徒や学習に困難を示す生徒も参加できる授業を目指し、そのために、小学校からの系統性を意識した授業展開を設定し、イメージマップや発問などのワークシートの工夫や、漫画を用いた資料を提示するなどの手立てを講じた。

(2) 実践から得られた結果

授業のねらいを達成した生徒は極少数であり、誰もが参加できる授業は実現することができなかった。しかし、この結果や授業を分析することで、筆者のUDLの捉えに課題があったことがわかった。筆者は、発達障害を抱える生徒や学習に困難を示す生徒ばかりに着目していた。しかし、クラスの中には様々な困難を抱えている生徒がおり、多様性に溢れた空間であった。UDLとは、「個々の違いを持ったすべての子どもたちが同じ学習内容に対して平等に公平に学習へのアクセスと機会をそれぞれに最適な方法で得ることができることを意味」(ホール,2018)しており、ある一人の生徒だけの学習を支えるものではない。「誰もが参加できる」ことを目指していたが、実際には困難を示す生徒だけに注意し、その生徒が授業に参加するためのワークシートの工夫やモチベーションを高めるための声掛けなどの手立てばかりを考えていた。

このような気付きから、「誰もが参加できる」とは、生徒一人ひとりが主体的に学び続けることが重要だと考えた。そのためには、生徒の「自己調整」や「実行機能」など、UDLのガイドラインに示される方略や感情のネットワークにも目を向けることが必要だと考えた。1年次後期では、全ての生徒が主体的に学ぶことができる授業をデザインするために、教師主導の授業を脱却した学習課題の設定と多様な学習方法の提供を実践することにした。

3 授業実践2 地理的分野「北アメリカ州」

(1) 実践の概要

1年次後期では、前期を踏まえて「主体的な学習者」の育成を目指してUDLの視点を取り入れた授業実践を行った。生徒が主体的な学習を行う際

に働かせる力が自己調整力であると考えた。そこで、単元を通して「学習内容」と「学習方法」を往還させて振り返ることができれば、生徒は自分の学習を自己調整し主体的な学習を行うことができるのではないかと考えた。生徒の自己調整を支えるために、ループリックと1枚ポートフォリオを活用した。

学習内容として、単元を貫く学習課題「なぜ、アメリカには人が集まるのだろうか」を設定し、課題追究を通して、多民族社会における共生について考えることを行った。

(2) 実践から得られた結果

ループリックと1枚ポートフォリオの振り返りや、撮影したビデオから生徒の行動を分析した。複数の抽出生徒を分析した結果、ループリックと1枚ポートフォリオを活用することの有効性を確認することができた。特に、授業に集中し続けることに困難を示す生徒の行動を分析した結果、ループリックを確認すると、それ以降の課題の従事行動が増加していることがわかった。このように、ループリックは学習者の学びのゴールの指針として効力があることが明らかになった。さらに、生徒の行動を細分化し、行動を「受動的参加」「積極的参加」「非課題従事」の3つに分けた。その結果、通常授業よりも参加率が上昇したことで、授業の改善点が明らかになった。

また、抽出生徒の1枚ポートフォリオの分析から、社会的事象に対する見方・考え方が広がり、学習後にも問題意識が持続していることが確認された。しかし、ループリックや1枚ポートフォリオが上手く機能しなかった生徒も見られた。ループリックや1枚ポートフォリオの改善の必要性はあったが、他の生徒の振り返りを分析すると、内容が表面的な記述も見られ、生徒の課題意識の持続に課題があるのではないかと考えた。そこで、2年次前期は「課題意識の持続」や「課題を自分事として捉えること」、「学習の見通しもつこと」などが必要な視点であると考え、実践に盛り込んでいった。

4 授業実践3 歴史的分野「冷戦」

(1) 実践の概要

2年次前期では、目指す「主体的な学習者」と「主体的な学習」の定義づけを行った(図1-1)。授業実践では、冷戦下における「東西ドイツ・中国の国民党と共産党・朝鮮の対立」を扱い、対立の内容とその原因を明らかにし、冷戦の全体構造を理解することをねらいとして行った。さらに、①生徒が「課題を自分事として捉える」ために、歴史的事象を生

徒の生活と重ね合わせる手立てを講じた。さらに、②生徒の「自己調整を支える」ために、ループリックの提示や自分に合った学び方を選択できるようなワークシートの工夫を行った。

(2) 実践から得られた結果

① 課題を自分事として捉える

ビデオや生徒のワークシートの記述を分析したところ、課題を自分事として捉えているような記述や発言は見られなかった。その原因を学習課題設定時の発話から分析した。

その結果、学習課題設定につながる授業者の発話から、次の授業者の発話までわずか2秒しかなかったことがわかった。課題を自分事として捉えられるためには、生徒がその事象について疑問や課題を感じる必要がある。そのためには、生徒が考える時間も必要であった。さらに、発話を見ていくと、授業者が主導して課題を設定していたことも確認された。課題を自分事として捉えられるためには、「生徒の言葉を使うこと」や、「生徒がじっくりと考えてから課題を設定する」必要があったと考えた。

② 生徒の自己調整を支える

学習の振り返りに、「今日の授業で、良かったと思う学び方は何でしたか？」という項目を設け、生徒が自分の学び方を振り返ることができるようにした。

「教科書や資料など自分に合ったもので調べることが理解を深められた」、「先生の話聞いて、黒板を写すだけではなくて、“自分で調べて書く”ことで理解が深まった気がしました」、「学習のゴールを決めることや調べたことを明確にすることで勉強の効率が良くなって細かいことも頭に入りやすくなると思いました」といった振り返りの記述から、「自分に合ったものを活用して学習すること」や「自分で調べてまとめること」、「ループリックで学習のゴールを確認して学んでいくこと」などを肯定的に評価していることがわかった。さらに、自分に合った学び方を選択できるようなワークシート、ループリックの提示の有効性を確認することができた。

5 授業実践4 特設単元「避難地図」

(1) 実践の概要

2年次後期の授業実践は、特設単元として、地震・津波からの避難方法について考える授業を行った。この実践においても、定義した主体的な学習を生徒が実現することができたかを分析した。生

徒が主体的に学習できるように以下のような手立てを講じた。

○課題を自分事として捉える

・課題設定の時に「間」を十分に取り、生徒の言葉を使って課題を設定する

・生徒の思考の流れを考え、前時とのズレを生むような単元構成を工夫する

○課題意識を持続させる

・振り返りシートに「今、感じている疑問や、新たに思い浮かんだ疑問」を記述できる欄を設ける

○自己調整を支える

・学習の目標や見通しをもつためのループリックの提示

・「学習内容」と「学習方法」を合わせた振り返り

・生徒が自分に合った学び方を選択できるための環境整備

分析は、①「課題を自分事として捉え、解決しようとしている姿・自分の生活と学習の関連性を捉えている姿」、②「解決のための見通しをもち、解決のための手段を自分で選択し、振り返り、改善していく姿」、③「最終的に課題に対して自分なりの考えを表現している姿」の3つの視点から行った。

(2) 実践から得られた結果

分析から、以下の①～③の姿に有効な手立てを明らかにすることができた。

① 「課題を自分事として捉え、解決しようとしている姿・自分の生活と学習の関連性を捉えている姿」

間を与えた後に、今まで話していなかった生徒が近くの子と対話し始めた。このような姿から学習課題の設定場面における「間」を設けることが有効であることがわかった。また、生徒の言葉を使い、教師が問い返しを行うことによって、課題を自分事として捉えている生徒の発言を別の生徒につなぐことができた。ここから、「課題設定を生徒の言葉を用いて行うこと」と「教師による『問い返し』が課題を自分事として捉えられている生徒の発言を別の生徒につなぐことができること」が有効であることがわかった。

② 「解決のための見通しをもち、解決のための手段を自分で選択し、振り返り、改善していく姿」

発話記録から、教師の問い返しによって本時の追究する観点を明らかにすることができ、生徒が見通しをもつことができた。ここから、教師による「問い返し」の有効性がみられた。また、発話から

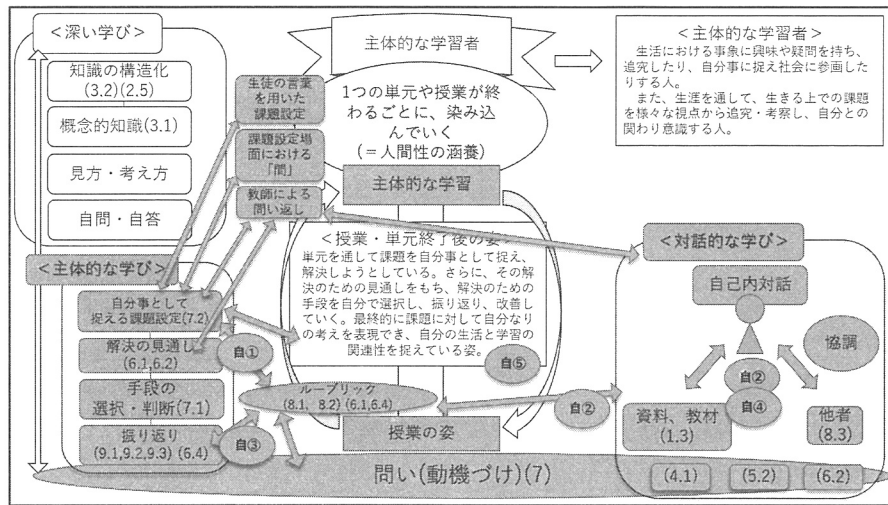


図2 「主体的な学習」において有効性が明らかになったもの

生徒が自分に合った学習方法を選択できる環境整備の有効性も確認できた。

③ 「最終的に課題に対して自分なりの考えを表現している姿」

影響した手立ては明らかにならなかったが、課題を自分事として捉えられていることで、表現するようになるのではないかとこの可能性が見られた。

6 中学校社会科における「主体的な学習」とは

(1) 主体的な学習とは

従来のような知識重視の教師による教え込みの授業では、これからの社会で求められる資質・能力は育成していくことには限界があり、生徒が社会科を学ぶということに意義を見いだすことを阻害してしまう可能性がある。確かに、コンテンツを押さえた授業であれば、重要な点に焦点化して指導することはできる。しかし、学ぶ必要性を感じていない生徒にとっては、その授業を苦痛に感じしまい、「学んでいる」とは言えないと状態になる。主体的な学習において重要なことは生徒自身が「学ぶ」ということである。もちろん「教室環境を整えること」や「ワークシートを工夫すること」も重要である。しかし、「主体的な学習」は、そのような視点だけでなく、「なぜ学習をするのか」「どのように学ぶのか」「課題を追究したい」など、UDL ガイドラインに示される「感情」や「方略」の視点も重要であることがわかった。

(2) 主体的な学習と自己調整

「主体的な学習」とは、1単元や1時間の授業で終わるものではなく、生涯を通して続いていくものであると考える。授業実践では、今までの学び方と比べて振り返りをしている生徒や、単元の中で

どの学び方が有効かを考え、選択している生徒の姿が見られた。このような生徒たちは、自分の学びを振り返り、次にどのように学ぶかの見通しをもととしているのではないかと。

このような生徒たちの姿から「主体的な学習」を支えるために自己調整力が重要であると考えた。生徒は自己調整力を働かせることで、自分に合った学び方を見いだしていき、次の学びにつなげていくことができる。「主体的な学習」とは、「学習内容」だけでなく「学習方法」も含めた学びであり、それらのつながりが中学校社会科においても重要であると考えられる。

(3) 「主体的な学習」において有効性が明らかになったもの

上記の図(図2)は、2年間の本研究の「主体的な学習」において有効性が明らかになった内容を再度まとめたものである。網掛け部分は、今までに述べてきたような、生徒の「主体的な学習」に有効に働いた内容である。

そして、この図のほとんどにUDLのガイドラインの番号が入り込んでいることが分かる。中学校社会科における「主体的な学習」を支えるためにUDLが下支えになっていたことが明らかになったと言えるのではないかと。特に、「実行機能」と「自己調整」は、「生徒がどのように学ぶのか」(方略)、「なぜ学ぶのか」(感情)を重要とし、「主体的な学習」に不可欠なものであることがわかった。

まだ、ルーブリックの内容の吟味や学習方法の振り返りに改善の余地がある。さらに、年間を通した「主体的な学習」はこれからの挑戦となる。これからも生徒の「主体的な学習」を支えるために追究していきたいと考える。